

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)／伊東
治己

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

①授業内容

高度専門職業人の育成を目指して、授業内容を今まで以上に教育現場を意識した実践的なものにするともに、まさに教育のプロとして教壇に立てるための知見が獲得できるような内容にする。

②授業方法

授業での到達目標を明確にするともに、その目標に向かって適宜ICTも活用しながら、ペア活動やグループ活動をなるべく多く取り入れ、受講生の主体的学習を促進する。

③成績評価

単に授業内容の理解度を測定するだけでなく、授業への主体的参加や貢献の度合いも加味した全人的な評価を行う。

2. 点検・評価

①授業内容

自分が担当して教職関係の授業である初等中等教科教育実践Ⅰ、英語科教育論Ⅱ、英語科教育論Ⅲ、主免教育実習事前事後指導(以上学部)、英語科教育特論Ⅰ、英語科教育演習Ⅰ、教育実践フィールド研究(以上大学院)においては、マイクロティーチングを取り入れたり、実施指導講師の授業を取り入れたり、最新にニュース(新聞記事)を投げ入れ教材として利用するなど、絶えず講義内容を教育現場を意識した実践的なものにすることができた。

②授業方法

授業オリエンテーションで授業での到達目標を明確にした上で、各種のペア活動やグループ単位でのマイクロティーチングを実施するなどして、受講生同士での話し合いや協力を促進するように配慮し、受講生が主体的に授業に参加できるように工夫した。

③成績評価

期末試験の成績や課題の中身の評価だけでなく、授業への主体的参加や貢献度も授業評価の観点として取り入れた。特に、マイクロティーチングを実施している授業においては、マイクロティーチングの出来具合をグループ全体の評価にしたり、マイクロティーチングに生徒として参加して受講生の評価も取り入れており、実施する方も生徒として参加する方も主体的に授業に参加できるように工夫した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

- ① オフィスアワーやゼミ等をフルに活用し、個々の学生の能力や希望に応じた学習支援を行う。
- ② 海外研修や留学に関する相談に随時応じて、学生による国際交流活動を促進する。
- ③ 英語コミュニケーションⅤ(学生海外派遣プログラム)を実行し、本学学生に海外生活体験の機会を与える。
- ④ 留学生が本学での留学生生活をスムーズに行えるよう、学業面・生活面で支援する。

2. 点検・評価

- ① オフィスアワーやゼミ等をフルに活用し、個々の学生の能力や希望に応じた学習支援を定期的実施した。
- ② 海外研修や留学に関する相談に随時応じたり、学生による国際交流活動を促進した。
- ③ 本年度も、本学学生に海外生活の体験を与えるべく、英語コミュニケーションⅤ(学生海外派遣プログラム)を計画・立案したが、最終的に参加希望者がプログラムの実施に必要な最低人数に達しなかったため、本年度の実施は見送ることとなった。来年度に向けての準備はすでに始めている。
- ④ 留学生が本学での留学生生活をスムーズに行えるよう、学業面(例えば授業では適宜英語も使用する)・生活面(例えば絵問題や悩み事が生じた段階で他のゼミ生の力も借りながら対応している)で支援した。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

- ① 従来からの研究テーマ(英語教育学)をまとめ、学会で口頭発表をする。
- ② 従来からの研究テーマ(英語教育学)をまとめ、学会誌に投稿する。
- ③ 現在特に力を入れているフィンランドの英語教育に関する研究をさらに進める。

2. 点検・評価

- ① に関しては、8月に北海道で開催された全国英語教育学会、および9月にフィンランドのユバスキュラ大学で開催された外国語教員の養成と研修に関するシンポジウムで口頭発表を行った。
- ② に関しては、本学の『小学校英語教育センター紀要』第4号と『授業実践研究』第13号に論文を投稿するとともに、『日本教科教育学会誌』にフィンランドの英語教育に関する論文を投稿中である。また、『英語情報』(日本英語検定協会)に4技能の指導に関する記事(合計6本)が連載された。
- ③ に関しては、9月と10月にフィンランドを訪問し、現地での英語の授業を観察するとともに、研究者との研究協議を行うとともに、平成26年2月には『フィンランドの小学校英語教育』(単著)が出版された。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①小学校英語教育センター所長として、大学の運営に参画するとともに、同センターの存在感のさらなる強化を図る。
- ②大学院教務委員会の副委員長として、本学の教育活動のさらなる発展に貢献する。
- ③言語系コース(英語)のコース長として、コース運営はもちろんのこと、大学運営にも積極的に貢献する。
- ④連合大学院言語系教育講座の講座代表および主指導教員として、同講座の運営に参画するとともに、同講座における本学の存在感を強めることに努力する。

2. 点検・評価

- ①に関しては、小学校英語教育センター所長として、大学の運営に参画するとともに、同センターの存在感のさらなる強化を図った。
- ②に関しては、大学院教務委員会の副委員長として、本学の教育活動のさらなる発展に貢献した。
- ③に関しては、言語系コース(英語)のコース長として、コース運営はもちろんのこと、大学運営にも積極的に貢献した。
- ④に関しては、連合大学院言語系教育講座の講座代表および主指導教員として、同講座の運営に参画するとともに、同講座における本学の存在感を強めることに努力した。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属学校での研究会に積極的に参加するとともに、同校教員と連携し英語教育分野について協同研究を進めるとともに、附属学校での国際交流にも貢献する。(附属学校)
- ②教育委員会等から委嘱された委員会活動や講演活動、ならびに本学主催の公開講座・免許更新講習や教育支援講師・アドバイザー等制度などを通じて、大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会貢献に努める。(社会連携)
- ③国際交流協定校をはじめとした海外の教育・研究機関との協力事業に貢献する。(国際交流)

2. 点検・評価

- ①の附属学校との連携に関しては、附属中学校での研究会に指導助言者として参加するとともに、学長裁量経費に基づく協同研究を附属小学校教員と共同して進めるとともに、10月には学長裁量経費に基づく研究の一環として、附属小学校の教員2名とフィンランドを訪問し、授業観察や教員との研究協議を行うと同時に、国際交流にも貢献した。平成26年四月からは「先駆的でかつ持続可能な小学校英語教育プログラム」の開始にこぎ着けることができた。
- ②の社会連携尾に関しては、教育委員会等から委嘱された委員会活動や講演活動、ならびに本学主催の公開講座・免許更新講習や教育支援講師・アドバイザー等制度などを通じて、大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会貢献に努めた。
- ③の国際交流に関しては、国際交流協定校をはじめとした海外の教育・研究機関(例えばフィンランドのユバスキュラ大学とタンペレ大学、オーストラリアのアデレード大学とニューイングランド大学)との協力事業に積極的に関わってきた。特に、タンペレ大学からはRiitta Jaatinen先生を地域連携センターの客員研究員として平成26年1月から6月の予定で招聘するとともに、3月には芸術系コース(音楽)の長島真人教授とともにタンペレ大学に出向き、将来の国際交流協定締結に向けての協議を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

附属学校との連携のところでも述べたが、平成25年度学長裁量経費「プロジェクト経費」による附属小学校と小学校英語教育センターの協同研究の成果として、平成26年四月より、文部科学省が平成32(2020)年からの開始を予定している小学校英語の教科化を先取りする形の「先駆的でかつ持続可能な小学校英語教育プログラム」を開始することができた。附属中学校3年次までを視野にいれた長期の英語教育改革プログラムであり、今後文部科学省等からも注目を集められる。